

今

からおよそ400年前の1614年12月、戦国大名の高山右近が百数十人の日本人キリシタンとともにマニラに到着。右近ら一行は、マニラ大聖堂の鐘が鳴り響くなか、マニラ総督や市民たちに迎えられ、熱狂的な祝祭が開かれた。

高山右近は織田信長、豊臣秀吉に仕えて頭角を現した戦国大名。高槻城主時代にキリスト教に傾倒し、キリシタンとなった。秀吉がバテレン追放令を出すと、信仰を守るため領地や財産を一切捨て、小豆島や肥後国などに隠れ住み、徳川家康がキリシタン追放令を下すと、長崎に向き、家族らとともに

にマニラに渡った。

右近の洗礼名は「ユスト」。ポルトガル語で「正義の人」という意味で、信仰に義を貫いたこの右近の生き様をカトリック修道会を通じてマニラのスペイン人為政者や市民は知っていた。

しかし、マニラ到着から1カ月ほど経った1615年2月4日、右近は長い船旅による疲れと慣れない南国



一六一五年二月 マニラの 高山右近

【文・写真】 澤田公伸



(右) マニラ大聖堂の門の上に刻まれたラテン語 (写真 Erik Liongoren)
(左) 黄色公園に立つ高山右近像。マニラ市と姉妹都市関係にある高槻市が1977年に建立した

イントラムロス内のマニラ大聖堂 (写真 Erik Liongoren)



での生活で体調を崩し亡くなってしまった。63歳だった。右近の葬儀は、当時のフィリピン総督だったスペイン人のファン・デ・シルバの指示でイントラムロス(城壁都市)内の聖アンナ教会で盛大に行われたという。

当時、スペインの植民地政庁が置かれていたマニラはメキシコ・アカプルコとの中継交易(ガレオン貿易)で栄えつつあった。日本から商人や武士なども訪れ、その一部はマニラに住み着いた。右近たちは、今のマニラ市パコ地区周辺に住んだとされ、現在、その一角にある「黄色公園(プラサ・ディラオ)」に右近の銅像が立っている。

その後、イントラムロスの郊外にあるサンミゲル(San Miguel)と呼ばれる一角にも日本人町が築かれ、最盛期にはおよそ3千人もの日本人が住んでいたという。サンミゲルという地名はキリスト教の天軍の総大将「聖ミカエル」から来ている。信仰を持ちながら武術にも長けた日本人武士たちの姿を見て、フィリピン修道会が日本人町にふさわしい守護聖人として「聖ミカエル」を奉ったと言われている。

右近の葬儀が行われ、遺骨も納められた聖アンナ教会は1622年に地震で崩壊し、その後、改築されて聖イグナチオ教会となった。しかし、太平洋戦争末期に米軍による日本軍への爆撃で崩壊。戦後、1945年に右近の物も含まれるとされる遺骨87柱はひとつにまとめられ、ケソン市ノバリチェスにある女子修道院に移された。

昨年、日本のカトリック教団が右近の列福を祈願するマニラ公式巡礼を行うなど、400年経った今、右近の功績に光を当てる動きが始まった。■



(左上から時計回りに) イントラムロス内の聖イグナチオ教会の跡地/マニラ大聖堂の十字架(写真 Erik Liongoren) /サンミゲル地区に近いマニラ市パコ地区のプラサ・ディラオ(黄色公園)にある高山右近像。当時は「黄色」は日本人を意味したという/マラカニアン宮殿に近い今のマニラ市サンミゲル地区にあるカトリック教会の聖ミカエル像